多様な女性像創出追う

川口恵子

「映画みたいに暮らしたい！」刊行

映画館の暗闇は、わたしにとって、日常から抜け出し、ほっと息をつく場所だ。社会のさまざまな場所で〈女〉であることから生じる軋轢や制約から逃れ、ひとり、暗闇で深い感情に触れ、自己再生をはかる。

そして映画について書くことは、自分をさらに深いところで生き直す作業といえる。震災後、これまで二十数年間書きためたものをまとめ、「映画みたいに暮らしたい！ エッセ・シネマトグラフィック・フェミナン」（彩流社）＝写真＝

として出版する過程で、そう実感した。

きっかけは、二十数年前、夫の勤務先となった静岡市に転居したことに始まる。映画の仕事をしたいという夢から遠ざかり、意気消沈していたところに、静岡新聞で連載を書く機会をいただいた。

当時、わたしはふたりの子をもつ30代。70年代フェミニズムの影響下にあり、自立した女性として生きることを求めていた。けれど現実はそうはいかない。そうした気持ちが、映画の女性像を探るという研究テーマに結びつき、今に至る。

本書に取り上げた約160本の映画の内、女性が主役の映画は70本近い。80年代後半以後の米映画は、「テルマ＆ルイーズ」のように、男性社会と闘い自由を求め飛翔する女性像を創出してきた。しかし大半は白人女性中心の物語だった。近年の「プレシャス」では、同じ80年代に生きる16歳の黒人少女が、教育と福祉の力をとおしてようやく、貧困・家庭内暴力・レイプ・エイズ被害というすさまじい環境から立ち上がる。

フェミニズムの影響は国境を超える。中国語圏の武侠アクション（「グリーン・デスティニー」「HERO」）における「戦う中国女性」像は、西洋社会に根強いオリエンタリズムを逆手にとり、「おとなしいアジア女性」のイメージを覆す戦略だ。近年では、巨匠マフマルバフを父にもつイランのサミラ、ハナ姉妹（「午後の五時」「子供の情景」）を筆頭にイスラム圏の女性監督の描く女性像が興味深い。

本の出版を機にコーディネーターとして関わるようになったNPO法人ウィメンズ・アクション・ネットワーク（WAN）のウェブ版映画欄では、今後、世界の多様な女性像を紹介してゆきたい。新たな生き方を模索する人たちの参考にしていただければと願っている。（慶応大非常勤講師）

かわぐち・けいこさん　愛媛県生まれ。新ソルボンヌ大修士課程、東京大博士課程修了。著書に「映画に学ぶ英語―台詞のある風景」「ジェンダーの比較映画史」など。

静岡新聞（夕刊）　2011年9月9日付